新聞漢字あれこれ135　「辺」 ２点しんにょうに驚き

　「こういう活字があったんだ……」と驚かされたのが、２点しんにょうの「辺」という字。昔の新聞記事を見ていて、こんな字が目に付きました。

　十数年前に1950年前後の北海道新聞で社会人野球の記事を見ていたところ、田辺という選手の「辺」が１点しんにょうではなく、２点しんにょうになっていたのです。当用漢字字体表が内閣告示されたのが1949年４月のこと。新聞活字に字体表の字形がまだ反映されていない時期だけに、てっきり旧字の「邊」が使われているものとばかり思っていました。

　日本経済新聞ではどうだったのかと思い、古い新聞で探したところ、1950年９月11日付朝刊１面に「ト大統領 炉辺談話」という見出しで２点しんにょうの「辺」を確認。ちなみにト大統領は米国のトルーマン大統領で、炉辺談話とは「いろりばたで、くつろいでする世間ばなし」（新選国語辞典第十版）のこと。同辞典の参考欄には「アメリカ大統領フランクリン-ルーズベルトが、この形式で政見などを国民に語ったところから」とあります。

　では、この２点しんにょうの略字は何なのか。1820～1946年までに印刷刊行された23種の活字総数見本帳を比較できる資料『漢字字体関係参考資料集 明朝体活字字形一覧（下）―1820年～1946年―』で調べると、この活字が1946年の朝日新聞『振仮名落振仮名附 漢字基本調査表』に唯一ありました。同社の『新聞活字用標準漢字の研究』（1946年）では、朝日新聞社使用略字集にある100字のうちの１字になっていました。比留間直和用語幹事によれば、戦前から使われていた活字とのことです。

当用漢字表の1850字を部首ごとに示した官報号外（昭和21年11月16日）をよく見ると、この２点しんにょうの略字があり、その後にかっこで旧字の「邊」が示されています。漢字表の「まえがき」には「簡易字体については、現在慣用されているものの中から採用し、これを本体として、参考のため原字をその下に掲げた」とあり、乱・両・区など131の簡易字体が採用されています。こうした漢字字体の整理はすでに大正時代から行われていたのでした。

1923年（大正12年）に臨時国語調査会が1962字から成る常用漢字表を発表。その中に154字の略字が採用され、２点しんにょうの「辺」も含まれていました。この漢字表は同年９月１日に新聞で実施予定でしたが、関東大震災で頓挫したといわれます。複雑な字形の漢字を略した活字は戦後に使われ始めたものと思われがちですが、古くから見られるわけです。明治期の新聞に「萬」の略字である「万」が使われているのを見たことを思い出しました。

１点しんにょうの「辺」が日本経済新聞に登場するのは昭和30年代半ばあたり。縮刷版で紙面を見ると、活字がまだそろっていないのか、他のしんにょうの漢字を含め、点が１つもあれば２つもありました。当時の読者は点の数や新旧字体の混在を気にしていたのでしょうか。

画像は2016年に発売の神経衰弱ゲーム「渡る世間はナベばかり」。24種の「辺」の旧字・異体字などが収録されているものですが、２点しんにょうの「辺」はないとのことでした。

《参考資料》

朝日新聞社技術研究所『新聞活字用標準漢字の研究』朝日新聞社、1946年

田島優『現代漢字の世界』朝倉書店、2008年

土肥直道「新聞字体、打ち明け話」『日本語論10月号』山本書房、1994年

文化庁『漢字字体関係参考資料集 明朝体活字字形一覧（上）―1820年～1946年―』大蔵省印刷局、1999年

文化庁『漢字字体関係参考資料集 明朝体活字字形一覧（下）―1820年～1946年―』大蔵省印刷局、1999年

保科孝一『ある国語学者の回想』朝日新聞社、1952年

『漢字百科大事典』明治書院、1996年

『国語施策百年史』ぎょうせい、2005年

『新選国語辞典第十版』小学館、2022年

『標準校正必携 第８版』日本エディタースクール出版部、2011年

「わが社の字体について」日本経済新聞社フォント・辞書部、1994年